

簡単なようで奥深い ガーゼ固定、軟膏塗布のキホンのキ

ガーゼは最小限の範囲に 薄く使用する

ガーゼの量は多ければよいというものではありません。褥瘡の場合は、ガーゼの厚みそのものでも圧迫になります。褥瘡以外でも、滲出液が多ければガーゼ全体に汚染が広がり、ガーゼ貼付部位の皮膚は、滲出液の付着により皮膚のバリア機能が低下し、創治癒に大きく影響を及ぼします。また、滲出液による汚染により不快感も生じます。

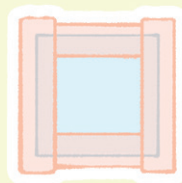
ガーゼの量はできるだけ少なく、交換の回数を増やしましょう。また、創周囲の皮膚のバリア機能を維持できるよう、保護する範囲も最小限となるよう努めましょう。保湿ケアや保護ケアなどスキンケアも重要です。



テープは体の動きを考えて 固定する

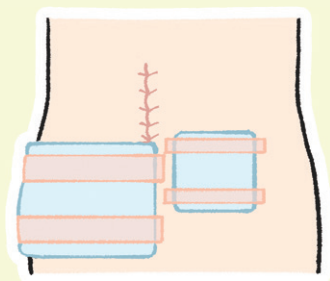
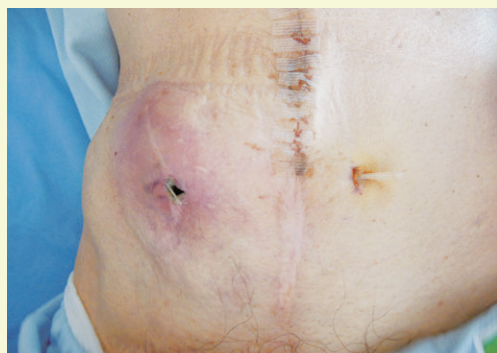
テープの固定は、ただ貼付すればよいというものではありません。貼付する部位に合わせて、身体の動きを考えた固定が必要になります。

身体の動きにより貼付されたテープが伸展することで身体の動きを妨げ、皮膚にテンションが加わり、皮膚損傷をまねくおそれもあります。身体の可動域が最大限活かされるよう、平行して固定することやガーゼを四方で固定しましょう。



創部の排液状況に合わせて 別々に管理する

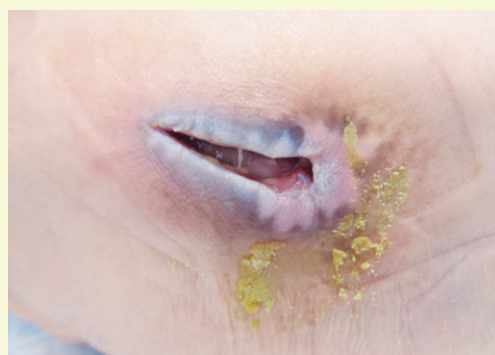
術後等で複数箇所のガーゼ保護を必要とする場合には、ドレーン挿入部や創部の排液状況に合わせた管理が必要になります。まとめて保護することで汚染の広がりにより逆行性感染のリスクとなるため、接触しないよう、それぞれで保護しましょう。



外用薬は創部に収まる 適量を使用する

外用薬は創部の状態に合わせて選択されています。使用する量は、多すぎても少なすぎても創傷治癒に影響を与えます。適量は創部の中に収まる程度の量です。

ガーゼ等で保護する場合、ガーゼにより外用薬が押し潰され広がることも想定して使用する量を検討します。交換時に外用薬が創周囲の皮膚やガーゼに残っている場合には、使用量が多い可能性があるため、使用量を見直しましょう。



5×5cmの創に、ヨード系軟膏5cm程度を創部の形状に丸めて充填する。クリーム系軟膏の場合は3.0～3.5cm程度を2本分の量を充填する

(黒木 さつき)

NPWT（陰圧閉鎖療法）を行う 患者の創傷ケア

事例紹介

患者：Fさん，80代，女性．身長150cm，
体重29.5kg，BMI 13.1

脳出血後遺症で完全寝たきりの状態で老人
保健施設に入所中．誤嚥性肺炎と診断され加
療目的のため当院へ入院された．入院時より
仙骨部に褥瘡を保有され，施設では洗浄後に
イソジン®シュガーパスタ軟膏で処置をされ
ていたが，入院後はプロスタンディン®軟膏
0.003％へ変更された．入院5日目に皮膚科
へコンサルトが入り，同時に皮膚・排泄ケア
認定看護師にもコンサルテーションがあり介

入することとなった．

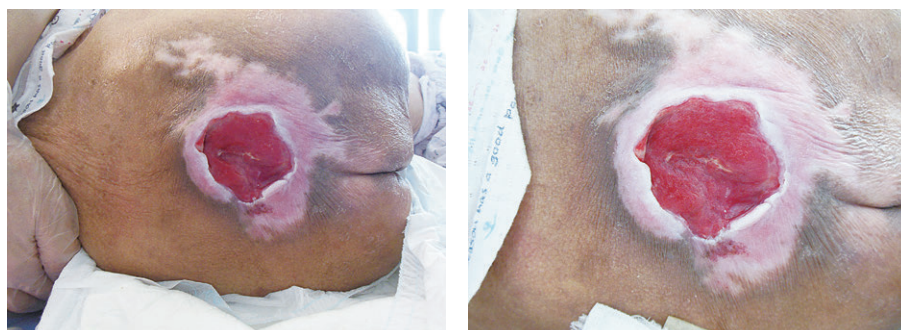
栄養管理はCVカテーテルからの高カロ
リー輸液が開始となり，退院調整では入院前
の老人保健施設ではなくCVカテーテル管理
が可能な施設へ転院することとなった．

既往歴：糖尿病，脳出血，脳出血後遺症にて
胃瘻造設

●創傷の状態

仙骨部に5.7×5.5cmの褥瘡がみられた
(図1)．

図1 Fさんの褥瘡



入院時より仙骨部に褥瘡がみられた

DESIGN-R®2020

D	E	s	I	G	n	p	合計
3	6	8	3C	5	0	0	22

Hさんの経過と結果

1 2回目以降のフォーム交換時

2回目以降のフォーム交換時には、間欠洗浄ができないか検討しました。当時は持続洗浄や浸漬、陰圧閉鎖療法のすべてをかなえる機器が院内で採用されていなかったため、持続洗浄用のチューブをフォーム内に挿入し、生理食塩水を1時間に1回50mL程度創部に手動で注入し、陰圧閉鎖療法を継続できるかトライしました。しかし、生理食塩水のIN/OUTに誤差が生じ、洗浄液の適切な回収に至っていない可能性があるとして、間欠洗浄は1日で中止となりました。

このとき創部からはワイヤーやドレーンが目視できる状態でした。これらを陰圧によ

ってフォームの除去時に引っ掛けて事故抜去となってしまうように、コンタクトレイヤーの使用は継続しました(図3-1)。

持続洗浄ができないため、フォーム交換時は創部の壊死組織は鋭匙で除去し、温かい生理食塩水を大量に流し、吸引しながら創部洗浄を行いました。胸骨下のドレーンもメラサキュームを使用しながら持続吸引していたため、洗浄時から洗浄後も排液の状態を見ていました。急激な排液の増量は、生理食塩水が創部を超えて臓器付近まで達することを示します。観察は注意深く行います。

また、創部ドレーンと陰圧閉鎖療法のポートの両方に陰圧がかかっているか、リークがないか確認しました(図3-2)。

図3 Hさんの経過①



ワイヤーやドレーンの事故抜去予防として、コンタクトレイヤーの使用は継続した



陰圧がかかっていることと、リークがないことを確認した